

松浪和夫

敬言

激震篇

官

魂

講談



ケ
力
ン
タ
マ
シ
イ



講談社文庫

常州大学图书馆
藏 警衛魂 章
激震篇

松浪和夫

講談社

著者 | 松浪和夫 1965年福島県生まれ。福島大学経済学部卒業後、地元の銀行に勤務。'89年銀行退行後、文筆生活に入る。'92年『エノラゲイ撃墜指令』（新潮社）が第4回日本推理サスペンス大賞佳作。他の作品に『摘出』『非常線』『核の枢』（以上、講談社文庫）、『SFGp 特殊作戦群 導火線』（徳間文庫）がある。

けいかんだまし
警官魂 げきしんへん
激震篇

まつなみかず お
松浪和夫

© Kazuo Matsunami 2012

2012年2月15日第1刷発行

発行者——鈴木 哲

発行所——株式会社 講談社

東京都文京区音羽2-12-21 〒112-8001

電話 出版部 (03) 5395-3510

販売部 (03) 5395-5817

業務部 (03) 5395-3615

Printed in Japan



講談社文庫

定価はカバーに
表示してあります

デザイン——菊地信義

本文データ制作——講談社デジタル製作部

印刷——豊国印刷株式会社

製本——加藤製本株式会社

落丁本・乱丁本は購入書店名を明記のうえ、小社業務部あてにお送りください。送料は小社負担にてお取替えます。なお、この本の内容についてのお問い合わせは文庫出版部あてにお願いいたします。

本書のコピー、スキャン、デジタル化等の無断複製は著作権法上での例外を除き禁じられています。本書を代行業者等の第三者に依頼してスキャンやデジタル化することはたとえ個人や家庭内の利用でも著作権法違反です。

ISBN978-4-06-277132-0

目次

警官魂 激震篇



講談社文庫

警官魂

激震篇

松浪和夫

講談社

目次

警官魂

激震篇

警官魂

激震篇

1

刑事時代の癖はとつくに抜けていたが、今朝は違った。

目覚めるとすぐ、三島^{みしま}勇造^{ゆうぞう}はベッドから抜け出し、窓際に行つた。カーテンを少しだけ開け、二階から外を見下ろす。自宅周辺の道路に素早く目を走らせた。

午前五時三十分、外はまだ薄暗く、静まり返っている。街灯の明かりが落ちた場所だけが白々と明るい。家の前の道路には路上駐車している車もなく、人影も見当たらない。

見られている。誰かの視線が張り付いている。そんな気がしてならなかった。だが、勘違いだったのかもしれない。考え過ぎだったのかもしれない。

二カ月に亘^{わた}つて監視を受けた日々。あのときはまさに針の筵^{むしろう}の上に置かれていた。しかし、その件はけりがついている。八カ月も前に終わったのだ。

三島は改めてそう自分に言い聞かせ、朝の支度^{したく}に取り掛かった。違和感は消えなかったが。

早紀さきの前に置かれた皿には、スクランブルエッグやトーストが殆どほとんど手つかずのまま残っている。牛乳に少し口をつけただけだ。

三島は、妻の友紀ゆきこ子と娘の早紀の家族三人で朝食をとっていた。

「どうした、早紀。元気がないな。どこか悪いのか」

早紀が気のない返事を返してくる。

「どこも悪くないよ」

「風邪でもひいたのか？」

「ひいてない」

早紀が短く答え、コップをテーブルに置いた。

「このところあまり食べていないだろう。それじゃ、体がもたない。スキー教室にも行けないぞ」

二週間程前から、早紀が朝食を残すようになった。夕食はいつも別々にとっているから、早紀の食欲が落ちていることに気づかなかつた。三島が帰宅する頃には、早紀は友紀子と夕食を済ませて自分の部屋に入っている。朝食は食べなくとも、学校の給食や夕食はしっかり食べているものと思っていた。

「行かない」

「行かない？ あれ程楽しみにしてたじゃないか」

「気が変わったの」

今年は、三日後の二十六日から一泊二日の予定でスキー教室が開かれることになっていた。学校行事のスキー教室に参加できるのは、小学四年生になつてからで、早紀は一年生のときからスキー教室に行くのを楽しみにしていたのだ。刑事時代には土日もなく、早紀をスキーに連れていく余裕はなかった。

「学校で何かあつたのか？」

三島が問いかけると、早紀は低い声で答えた。

「何も」

「それじゃ、どうしたんだ」

「だから、何でもないって」

「心配して訊^きいているんだ。何があつたのか、話してみなさい」

早紀が無言のまま席を立とうすると、三島は声を上げた。

「待ちなさい、早紀」

早紀が背を向け、テーブルから離れていく。

「まだ話は終わっていない」

三島がそう言つて立ち上がろうとすると、急に腕をつかまれた。斜向かいに座つて

いた友紀子が手を伸ばしてきたのだ。

「そつとおいてやって」

それまで黙っていた友紀子が口を開き、真剣な目で見つめてくる。

「お願い」

三島は椅子に腰を落とした。早紀はもう廊下に出て行ってしまった。

友紀子が手を離すと、三島は彼女の方に向き直った。

「何があつたんだ」

友紀子が首を横に振る。

「分らないの」

「おまえにも話さないのか」

「ええ。半月くらい前から、急に元気がなくなつて。何度かそれとなく訊いてみたけれど、話してくれないのよ」

「いじめか」

「違うと思う。今はそつとおいた方がいいわ」

友紀子の勘は鋭い。いじめではないのかもしれない。だが、学校でいじめを受けているのだとしたら、放っておく訳にはいかない。

「一度、先生に相談してみた方がいいんじゃないのか」

「今は刺激しない方がいいわ。事を荒立てることになるかもしれないし」

「そんなことを言ってる場合じゃないだろう。問題を抱えているんなら、助けてやらないと——」

三島の言葉を遮り、友紀子ともきこが言う。

「それより、あなたの方が心配」

友紀子が三島の目を見て、訊ねてくる。

「また何かあったんじゃない？」

先程とは打って変わって、友紀子の声音こゐねは硬い響きを持っていた。

「今朝、寝室の窓から外を覗いていたでしょう。見張りを警戒しているみたいに」

朝起きたとき、友紀子は寝室にいなかった。先程、外の様子を窺うかがっていたところは、見られていないはずだった。だが、友紀子は三島の行為を知っていたのだ。

三島は動揺を悟られないように、平然とした口調で答えた。

「何でもない」

「本当に？」

「俺の勘違いだった」

「だったら、いいんだけど」

「疲れが溜まってたんだ。ただの勘違いだ。心配いらない」

友紀子の顔からは硬い表情は消えない。

三島自身、完全には否定できていなかったが、冷静な口調を保って、勘違いだと繰り返した。

八カ月前、家中を吹き荒れた嵐。昼夜を問わずに鳴り続ける電話。その電話から放たれる罵詈雑言^{ばりぞうごん}。差出人不明の手紙に書かれた、裏切り者という文字。電話の呼び出し音が鳴ると、早紀は表情を強張らせ、耳を塞ぎ自分の部屋に逃げ込んで行つた。三島自身に対する攻撃だけでは済まなかった。鉾先^{ほこさき}は友紀子にも向けられた。買い物をしていると、主婦仲間たちから完全に無視されるようになった。

嵐は一カ月近く吹き荒れ、平穏な日々が戻ってきた。その嵐が来ることはもうない。終わつたのだ。だが、完全になくなるという保証はない。ただ、早紀と友紀子の二人を嵐に巻き込みたくはない。

「出かける」

三島は一言で友紀子との会話を一方的に断ち切り、腰を上げた。ダイニングキッチンを出て、玄関^{あいづ}わきの和室^{しやうわ}に入り、制服姿の父の遺影を見上げる。父はいつまでも若々しい。会津地方の昭和村^{しやうわ}に駐在していたときに起きた籠城事件^{ろうじやう}で、父は人質救出に入り、落命した。三十六歳という若さで殉職^{じゆんしよく}したのだつた。

三島は父の年齢を、八年前に越えた。もし、父が生きていたら、今の三島を見てど

う言うだろう。答えが来る訳がないと分かっているが、毎朝同じことを考えてしま
う。

三島は、いつも通りに遺影に向かつて敬礼し、和室を出た。見送りに出てきた友紀
子からコートを受け取って着ると、行つてくると告げて玄関ドアを開けた。早朝の冷
気が流れ込んでくる。

三島はドアを出て閉め、南の方を向く。住宅街の屋根の向こうにある信夫山しのぶやまが視界
に入ってきた。標高三百メートル程の小さな山で、福島市の中心部と郊外を分けてい
る。北側の斜面の所々が白い。今年は冬の訪れが早く、十二月に入つて何度か雪が降
っていた。

カーポートのレガシィB4のフロントガラスに付いた霜をヘラで掻き落としなが
ら、三島は周囲にさりげなく視線を飛ばす。路上に止まっている車はない。近所の住
人がいるだけで、見覚えのない人間はいない。やはり、勘違いだったようだ。監視さ
れてはいなかった。

運転席に乗り込み、エンジンに火を入れると、三島は大きく息をついた。レガシィ
を出し、住宅街の路地をゆつくりと進んでいく。路地を出て、市道に合流したとき、
バックミラーの隅に一台の車が映った。銀色のフォルティス。四十メートル程の車間
距離を保つて尾いてくる。こちらがスピードを上げると、フォルティスも同様に速度